

乳児期の母子相互作用と情緒発達

1. 乳児と母親との情緒的コミュニケーションの日米比較
2. ストレンジ・シチュエーションにおける乳児の情緒的反応
(分担研究：相互作用と乳幼児の心理・行動発達に関する基礎的研究)

三宅和夫^{*}、金谷有子^{**}、中川みゆき^{***}

要約 第1の研究では5カ月児と母親との情緒的コミュニケーションについての日米両サンプルについての記述的データを提出する。両サンプル間で母親の乳児の情緒表出に対する反応に共通点と差異点が見いだされた。児のポジティブな表出に対しては日米いずれの母親も同じポジティブな表出で応答することが多い。これに対して児の表出に対する無応答の割合は日本のほうが高い。第2の研究では12カ月児のストレンジ・シチュエーションのエピソード3(母と児と見知らぬ女性の場面)における児の母のほうを見るというreferencingについて日米比較がなされた。米国サンプルではreferencingと愛着のABC分類とに関係が見られたが、日本では有意な関連はなく、恐れへの反応とみられる母への接触との間に関係が見られた。すなわち日本の12カ月児はこの状況でかなりのストレスを受けているといえる。
見出し語 母子相互作用, 情緒発達, ストレンジ・シチュエーション, ソーシャル・リファレンシング

1. 乳児と母親との情緒コミュニケーションの日米比較

三宅和夫, 金谷有子

目的 本研究の目的は、日本およびアメリカで行われた家庭での自然場面の観察データを分析し、母子の情緒コミュニケーションについての記述的データを提示することである。これは情動の社会化に関する日米比較研究の予備的報告である。この比較研究の主なねらいは、(1)乳児はどのように自分の情動表出の調節方法を学んでいくのか、(2)母親の行動を通してどのように情動は社会化されていくのか、という点にある。このようなプロセスを理解するためには実際に日常の母子のやりとりを観察しなければならない。そして乳児の異なるタイプの情動表出に対して一体母親はどのよう

に反応しているのかをまず知る必要がある。次に母親の情緒的応答の性質を知る必要がある。

子どもの発声や微笑あるいは泣きに対する母親の応答のタイプを調べた先行研究はいくつかある。しかし、それらの研究は母親の応答の情動的側面については詳しく言及してはいない。従って本研究ではこのような点に焦点を当てて分析方法を考案した。情動の表出を記述するためのコーディングカテゴリーを作成し、それらの妥当性も吟味したいと思う。

方法 対象者：表1にあるように、日本人のグループは、札幌市在住の生後5カ月の乳児とその母

* 北海道大学教育学部発達心理学教室 (Dept. of Developmental Psychology, Faculty of Education, Hokkaido Univ.)

** 国学院女子短期大学 (Kokugakuin Women's Junior College)

*** Dept. of Psychology, Univ. of Maryland Baltimore County

親42人であり、アメリカ人のグループは、イリノイ州シャンペインに住む5カ月児とその母親15名である。ただし、本報告の分析対象者は、それぞれのグループからランダムに12名と10名を選んだ。母親の平均年齢は、日本が28才、アメリカが28.3才である。また日本の母親の平均教育年数は14年（短大卒）で、アメリカの母親は平均16年（大学卒）であった。

観 察：カメラ操作者2名と観察者1名計3名が、各家庭を訪問し、観察および記録を行った。日常の母子のやりとりを2台のビデオカメラで（1台

は母親に、もう1台は子どもに焦点を当てながら）録画した。これは母子それぞれの顔の表情をとらえるためである。観察前に、母親には子どもに対して普段通りの関わりをしてほしい点、及び観察者やカメラマンをなるべく気にしないでほしい点のみ教示した。観察された場面は、食事（ミルクや母乳、あるいは離乳食）、おむつかえや着替えなどの世話、ひとり遊びや母子間の遊び、眠いときの世話などである。録画記録された時間は90分である。

表1 日米の対象者

	日 本	長 子	次 子		アメリカ	長 子	次子以下
男		14 (3)	10 (3)	男		2 (1)	5 (4)
女		10 (3)	8 (3)	女		3 (3)	5 (2)

()の中の数字は本分析の対象者である。

分析方法：ビデオテープを再生しながら、2分30秒毎に、30秒間をコーディングしていった。つまり30秒の間に表出された子どもの情動と、それへの母親の応答を記述し、次の2分間はコーディングを休み、再び次の30秒間を記述という方法を採用した。いくつかの方法を試した結果、この方法の利点は、時間の節約が可能なことと、各ケースの特徴の代表性が高いということであった。

分析カテゴリー：乳児のNegative及びPositiveな情動表出と、それへの母親の応答（顔の表情や声の調子）を以下のようなカテゴリーに分類した。
乳児のNegative Expression: (1) Intense Cry（強い泣き） (2) Cry（泣き） (3) Fuss（ぐずり） (4) Intense Negative Vocalization/Face（声や顔の表情による強い嫌悪の表出） (5) Negative Vocalization/Face（声や顔の表情による強い嫌悪の表出） (6) Slightly Negative Vocalization/Face（声や顔の表情による弱い嫌悪の表出）

乳児のPositive Expression: (1) Laugh（声を出した笑い） (2) Smile（ほほえみ） (3) Positive

Vocalization/Face（明るいあるいは楽しそうな顔や声） (4) Slightly Positive Vocalization/Face（どちらかといえば陽性な表出）
母親の主なNeutralな応答: (1) N / N（顔も声もNeutral） (2) N / N soft（顔や声がNeutralだが、声が静かで優しい） (3) N / N-（顔はNeutralだが、声は子どものNegative Expressionのまねあるいは、Sadな調子） (4) N / N play（顔はNeutralだが、声は遊ぶ調子）
母親の主なPositiveな応答: (1) N / P（顔はNeutralだが声はPositive） (2) N+ / N play（顔はややPositiveで、声の調子は遊び的） (3) P (SM) / N（声はNeutralだが顔は微笑んでいる） (4) P (SM)（微笑のみのとき）
母親の主なClearly Positiveな応答: (1) P (SM) / P（微笑と明るいあるいは楽しい声の調子） (2) N+ / P (LA)（明るい表情と笑い） (3) P (SM) / P (LA)（微笑と笑い） (4) P (SM) / Play（微笑と遊びの声の調子） (5) P play / N+ play（顔を作って遊ぶ、声は楽しげ） (6) P play / P

(顔を作り、声は明るい調子)

母親のNegativeな応答：カテゴリーは作ったが、記述の段階でほとんど全く出てこなかったので省略する。

母親の無応答：子どもの情動表出に対して応答がない場合をNon-Response(NR)として記述した。

各情動が表出された状況：情動が表出された場面も記述した。またFace-to-Face状況であるかどうかも記述した。

記述の信頼性について：

コーディングは2名でそれぞれ独立に行った。各カテゴリーについての一致率は、80%から100%で十分高かった。

なお、上述のコーディングのシステムについては、IzardのMAX(1983)ならびにShererのVocal expressionの研究(1982)を参考にして作成された。

結果と考察

(1) 乳児の情緒表出の日米比較

表2は子どもの情動表出の種類とその人数の割合を示している。日本の乳児は、Negativeな表出の種類がアメリカの乳児よりやや多いようである。

(2) 母親の応答の日米比較

子どもの情動表出に対して母親がどのようなタイプの応答をしたかを調べた。表3がその結果で

ある。日米子どものNegativeな表出に対して母親がNeutralで応答することが多いこと、子どもの

表2 日米乳児の情動表出

	日	米
Intense Cry	25.0	0.0
Cry	41.7	20.0
Fuss	58.3	50.0
Intense Neg.	25.0	10.0
Negative	83.3	60.0
Slightly Neg.	100.0	90.0
Laugh	16.7	0.0
Smile	100.0	60.0
Positive	41.7	50.0
Slightly Pos.	100.0	90.0

数字は%

どのような表出に対してもNegativeで答えることはないことについては日米で共通の傾向が見られた。また子どものPositiveに対しては、母親は同じくPositiveで答えるばかりでなく、Clearly Positiveで答えることが多かった。子どものNegativeと

表3 母親の応答のタイプの日米比較

乳児 母親	Negative		Slightly Positive & Neutral		Positive	
	日	米	日	米	日	米
Neutral	40.0 (95.6)	54.2 (81.3)	22.5 (80.0)	28.6 (56.1)	0.0 (0.0)	21.1 (30.8)
Positive	1.8 (4.4)	4.2 (6.3)	4.5 (16.0)	8.0 (15.8)	10.7 (23.1)	15.8 (23.1)
Clearly Positive	0.0 (0.0)	8.3 (12.5)	1.1 (4.0)	14.3 (28.1)	35.7 (76.9)	31.6 (46.2)
Non-Response	58.2	33.3	71.9	49.2	53.6	31.6

数字はすべて%。()の中の数字は全応答に対する割合。

Slightly Positive & Neutralに対しては、多くは Neutralで応答していたが、Positiveの時よりも少なかった。このような結果をまとめて考えてみると、5カ月の乳児の母親は、子どもの泣きやぐずりに対しては共感的まねで答える場合以外は、子どもの状態をよくするような情緒的応答がしていること、つまり母親は子どものNegativeな情動の調節者としての役割をはたしていると考えられる。一方子どものPositiveな情動に対しては、母親はそれを一層高めたり、持続させたりするような応答をしているといえる。ところで日米の母親の間には次のような相違が見られるようである。すなわち乳児のどのような表出に対しても無応答の割合は日本の母親のほうが多いという傾向が見られる。いいかえればなんらかの応答をする場合はアメリカの母親のほうが多いということである。このことから子どものNegativeな情動を調節する一方、Positiveな情動に対して強化を与えるような働きかけがアメリカの母親のほうに顕著である

と考えてもよいであろう。

(3) 母親の応答の種類の日米比較

母親のNeutral、Positive、そしてClearly Positiveの応答の種類を分析した結果が表4である。全体的にみると、5種類以上の情動表出を示した割合は、日本が半数の50%に対してアメリカは90%であった。つまり日本の母親よりアメリカの母親の方がバラエティに富んだ応答をしているといえよう。既に述べたように乳児の情動表出は日本の方がやや多かったこと、そして母親の無応答の割合は、アメリカの方が少なかったことを考え合わせると、アメリカの母親は子どもと関わる際には明瞭な形で応答する傾向があるといえるようである。一方日本の母親の情緒的表出はNeutralな形が多い傾向があるようだ。表4にもあるようにNeutralな表出の分布の幅は、日本の方が大きい。PositiveやClearly Positiveに関してはアメリカの方がやや多いように思われる。

表4 母親の応答の種類の日米比較

種類	Total		Neutral		Positive		Clearly Positive	
	日	米	日	米	日	米	日	米
10	1(8.3)	0(0)						
8	0(0)	1(10)						
7	0(0)	2(20)						
6	3(25)	4(40)						
5	2(16.9)	2(20)	2(16.9)	0(0)				
4	1(8.3)	0(0)	2(16.9)	7(70)				
3	2(16.9)	1(10)	4(33.3)	2(20)	1(8.3)	1(10)		
2	1(8.3)	0(0)	0(0)	1(10)	0(0)	0(0)	3(25)	5(50)
1	1(8.3)	0(0)	3(8.3)	0(0)	6(50)	7(70)	6(50)	3(30)
0	1(8.3)	0(0)	3(25)	0(0)	5(41.7)	2(0)	3(25)	2(20)

各数字は人数。()の中は%。

以上のことから、日米の母親共に子どもの情動の調節者としての役割をはたしていることがわかったが、日米の違いは子どものような情動をどのように調節していくかといった点に見いだされるように思われる。例えば母親の情緒的応答における強度やバラエティに違いがある。Positiveな面

についてみると、日本の母親は子どもの表出を受容するが、それを積極的に変えていくような方法はあまりとらないようである。子どものあるがままをなるべく邪魔しないようにしているように見える。一方アメリカの母親はどちらかというなるべく子どもの表出を引き出すような関わり方を

しているように見える。このような違いが後に子どもの情動の社会化の面でどのような影響を与えていくのかを検討することが今後の課題である。

文 献

- 1) Izard, C. E. :The maximally discriminative facial movement coding system. Revised edition, Instrumental Resources Center, University of Delaware, Newark, Delaware, 1983.
- 2) Kanaya, Y., Bradshaw, D. L., Nakamura, C., & Miyake, K. :Expressive behavior of Japanese mothers in response to their 5-month-old infant's negative and positive expression. Annual Report 1986-1987, Research and Clinical Center for Child Development, Faculty of Education, Hokkaido University, 1988.
- 3) Scherer, K. R. :Method of research on Vocal communication: Paradigms and parameters. In K. R. Scherer & P. Ekman (Eds.), Handbook of methods in nonverbal behavior research. New York, Cambridge University Press, 1982

2. ストレンジ・シチュエーションにおける乳児の情緒的反応

中川みゆき, 三宅和夫

目的 12カ月齢の乳児を対象として新奇な部屋において見知らぬ人との接触、母親との分離と再会という8つのエピソードからなる一連の経験をさせることによって乳児の母親への愛着についての測定をするいわゆるストレンジ・シチュエーションはもともと Ainsworth によってアメリカで開発されたのであるが、その後広く欧米ならびにイスラエルそしてわが国でも用いられるようになってきた。一般にそこにおいて乳児が示す行動によって愛着の安定、不安定が測られるとして、A、B、Cの3つの型に分類がなされこのうちBが安定した愛着の型、AとCが不安定な愛着の型と分類されている。

周知の通り、Aは Avoidant な型で、母との分離前に母と関係を持たずに探索行動を示して、母と再会した時に避けたり無視する。これに対してCは Ambivalent な型で、母との分離前に、部屋や知らない女性に慣れることができず、探索行動が限定されており、母との分離で強い情緒的混乱を表わし、母と再会した時にだっこを求めたりする反面、きげんが直らず、抵抗を示す。安定した愛着の型といわれるBは母との分離前は母との関係を保ちつつ積極的探索行動を示し、母と再会した時には笑ったり、話しかけたり、だっこを求めたりして、きげんが直り、探索行動に走る。

ところでわれわれが57名の12カ月児について分類をしたところA型は0(0%)、B型は39

(64.4%)、C型は13(22.8%)分類不能つまりA、B、Cのいずれにもあてはまらぬ型5(8.8%)となった。

アメリカにおけるいくつかの研究における分類をまとめたものによるとA、B、Cの割合はおおよそ23%、62%、15%であり、われわれの見いだした比率はこれとくらべるとA型が皆無ということ、C型が多いという特徴がある。このような日米間における差の生じたひとつの要因として乳児の気質における人種差というものが考えられるかもしれない。また日本に独特な文化的要因が Strange Situation における子どもの行動にある種の影響を与えたことがA型が全くないこと、C型の比率が高いことのみひとつの大きな理由と推定される。たとえば母との分離の影響が非常に子どもにとって stressful であるために母との再会に ambivalent な行動を示したと考えられる子どもや、母との分離の以前から不安の高い行動を示した子どもがこのなかにも多いということがある。したがってわれわれの子どもが生後1年間において新奇な場面に置かれるような機会がどのくらいあったか、知らない大人と接触した機会はあったのかとか、さらには母と分離して過ごした経験の量はどうかなどが検討されなくてはならないであろう。われわれの母親面接の資料によればひとり平均月に2.5回しか子どもを他者にあずけて出かけたことがなく、しかもその他者はほと

んど父親か祖母であるということが明らかになっている。また、子どもだけでなく母親が子どもと分離するときに抱く感情にも大きい文化差があると思われる。Strange Situationにおいて母親には十分な指示があらかじめ与えられているので一応母親行動にはあまり個人差、文化差はないと考えられるが、微妙な母親の身ぶりや表情や声の調子の変化などまではコントロールすることは不可能であり、そのような面では文化差があるということが、われわれがアメリカのStrange Situationのビデオテープを見て感じたことである。この点についてのつっこんだ検討も必要であろう。

Strange Situationを日本の子どもについて用いることが適切であるかどうかの問題とは別に、このSituationは単にA、B、Cの分類をするだけに用いられるのではなく、母子間の情動コミュニケーションなどいろいろな母・子双方についての情報を得るために用いられるものであると考えられ、今後いろいろの角度から分析を続ける必要であろう。

ところでここでの主な目的は、母との分離前の母と子のいるところへ見知らぬ女性が入ってきて3分間過ごすといういわゆるエピソード3における乳児の母に対するsocial referencingについて検討し、その結果をアメリカでの研究結果と比較することによって日本の12カ月児にとってストレンジ・シチュエーションがどのような心理的意味を持つのかを考えることである。Social referencingとは視覚的、聴覚的手段によって他者(ここでは母)からの情緒的な情報を求めることであまいな状況(ここでは見知らぬ女性)についての評価をするという傾向をさしているのである。

Dicksteinら(1984)によれば、C型の12カ月児のSocial referencingが最も多く、A型のそれが最も少なく、B型はその中間である。これは前述のA、B、Cによる愛着の安定・不安定の分類の説明と一致するように思われる。もしさきの日本におけるA、B、Cの比率が示すようにストレンジ・シチュエーションが日本の乳児にとってストレスが高いものであるならば、Social referencingが全般に少なくむしろ恐れ反応が多く見られることが考えられる。したがってまたSocial referencingと愛着の分類の間には関係が見られないと想定される。

方法 Social referencingの測度としてエピソード3において見知らぬ女性のほうを見たあと母のほうを見るというreferencingの回数と持続時間(秒)が用いられた。また、乳児の示す恐れ指標として、Proximity to mother(母にさわらないで1m以内にいる)、Touching(母にふれる)、fussing/cryingが用いられた。

結果 対象とした12カ月児のうち約70%が、エピソード3においてreferencingを示した。Table 1には1分間ごとのreferencingの回数が示してある。またDicksteinらの結果を比較のためにあわせて示した。ここから日本の乳児のほうがreferencingが少ないことが推測される。

つぎにproximityを示した児は26%、touchingを示した児は61%、fussing/cryingを示した児は17%いた。Table 2に見るようにtouchingの持続時間が他よりも長い。またreferencingと恐れとの3つの指標との関係(Spearmanの相関)についてTable 3に示したが、referencingとproximityとは有意な相関は見られない。これに対してreferencingとtouching、ならびにfussing/cryingの間にはいくつか有意な相関が見られる。

Referencingが多ければ多いほど母から離れて過ごすことが長く、母にさわることがないわけである。また、1分目、2分目に恐れを感じると、それが2分目、3分目において母にさわることにつながるということがTable 3から読みとれるであろう。

TABLE 1

Mean Frequencies of Maternal Referencing: Japanese and American Samples

	Minute		
	1	2	3
Japanese			
Means	.98	1.33	.15
SD	1.04	1.80	.34
American *			
Means	2.47	1.98	.49

* Dickstein et al. (1984)

TABLE 2

Means, Standard Deviations, and Medians for the Duration of Proximity, Touching, and Fussing/Crying

	Minute		
	1	2	3
Proximity			
Means	3.19	2.80	2.56
SD	1.33	1.22	1.22
Median	0	0	0
Touching			
Means	14.96	22.35	16.87
SD	3.08	3.56	3.37
Median	0	4.0	0
Fussing/Crying			
Means	1.31	2.46	9.58
SD	.18	.34	1.34
Median	0	0	0

TABLE 3

Correlations between Maternal Referencing and Touching

	Maternal Referencing		
	1	2	3
Touching			
1	-.50***		
2	-.34**	-.51***	
3	-.34**	-.49***	-.18
Fussing/Crying			
1	-.26*		
2	-.21	-.19	
3	-.10	-.21	.03

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

つぎに愛着の分類と referencing との関係についてみたのが Table 4 である。3 (1分目、2分目、3分目) × 2 (B、C) の ANOVA の結果、B、C 分類の主効果はなかったが、1分目～3分目には有意な主効果があった。また交互作用は有意ではなかった。このことから愛着の分類と母への referencing には関係がないといえる。

これに対して恐れ of 指標と愛着分類との関係では touching のみが B、C 分類との間に有意な関係があり、C のほうが B よりも多く touching を示すといえよう。

TABLE 4

Means and Standard Deviations of Maternal Referencing by Attachment Classifications

		Minute		
		1	2	3
B	Means	1.00	1.50	.17
	SD	1.06	1.85	.38
Attachment Classification C	Means	.92	.75	.08
	SD	1.00	1.55	.29

考察 日本の乳児がエピソード 3 で母への referencing を示すことが少なかったのは、この状況がアメリカの乳児に対してとちがってあまりあまいなものではなく、恐れを引きおこすのに十分なものであったためと考えられる。そこで日本の乳児は母からの情緒的な情報を求める必要がなく恐れを感じたために母に近づきさわるという反応をしたと考えられよう。

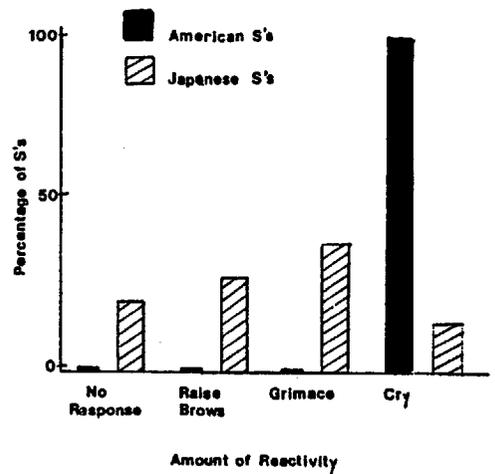
また愛着の B、C 分類と referencing との間に関係がなかったということは、C と分類されたのはこれらの児が不安定な Ambivalent な愛着を形成しているからではなく、ストレンジ・シチュエーションで母との分離前からストレスを強く受けすぎたために情緒的に混乱し、その結果 C と分類されるような行動を示したと考えられよう。したがってストレンジ・シチュエーションによって愛着の安定・不安定を分類することはすくなくとも

日本の乳児には不適當であるといえよう。

また母との分離以前のアメリカであれば、児にとって多少不安を生じさせるといった程度の状況が、多くの日本の乳児にはかなり高いストレスを与えるもので恐れを引き起こすのに十分であったということは、生後1年間の母子相互作用にかかわる経験が日米間で大きく異なるということを示唆するものであろう。

さきにもうひとつの先行要因として児の気質における人種差ということを想定したが、この点についてこれまでの研究についてみると新生児期、乳児期初期において日本(東洋)の児のほうがアメリカ(白人)の児よりも感覚、感受性、反応性、において低く、ぐずりや泣きが少ないことを示唆しているもののほうが多いのである。われわれも最近Lewisと協力して2-3カ月児の注射に対する反応についての日米比較を行ったのであるが、泣きを示した児の割合はアメリカのほうがはるかに高かった(Figure 1参照)。つまり日本の乳児のほうが反応性が低いということが考えられる。そうであるならば、さきのストレンジ・シチュエーションでの日米の乳児の示す行動特徴とは反対の気質の特徴が初期には存在するのかもしれない。このことは、いっそう生後1年間においてそれぞれの文化において母子相互作用とかかわるどのような経験を児がするのかということがさきのような12カ月時に示す行動を理解するために必要になってくる。われわれのグループが行っている母子間の情緒的コミュニケーションについての研究もこうしたことに迫るためのものである。

Figure 1



文 献

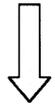
- 1) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. :Patterns of attachment, Hillsdale, NJ, Erlbaum, 1978.
- 2) Dickstein, S., Thompson, R. A., Estes, D., Malkin, C., & Lamb, M. E. :Social referencing and the security of attachment. *Infant Behavior and Development*, 7, 507-516, 1984.
- 3) Miyake, K., Chen, S. J. & Campos, J. J. : Infant temperament, mother's mode of interaction, and attachment in Japan: An interim report. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 1-2, 276-297, 1985.

Abstract

Infant's Emotional Development and Mother-Infant Interaction

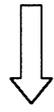
Kazuo Miyake*, Yuko Kanaya** & Miyuki Nakagawa***

1. The purpose of this study is to present descriptive data on mother-infant emotional communication in Japan and in the US. This study focused on how infants' regulation of their expressions is enculturated through the mother's behavior. In order to understand this process, we gathered data on maternal responses to different types of infant expressions and on the nature of the emotion expressions mothers display to their infants in the home. To date, we found some trends toward similarities and differences in maternal behavior. Both Japanese and American mothers almost never display negative affect to their 5-month-old infants. By contrast, when infants showed positive expressions, American mothers as well as Japanese mothers tended to respond with the same expression with slight exaggeration. Japanese mother's non-response to infants' emotion expression was higher than that of American mothers. Our results suggest mothers' role of modulator of their infants' negative and positive emotion.
2. Fifty-four 12-month-old Japanese infants and their mothers were observed in Ainsworth strange Situation procedure. The psychological meaning of the Strange Situation was explored by examining the associations among social referencing, fearful reactions, and attachment classifications. Social referencing and fearful reactions were coded in episode 3 of the Strange Situation and the infants were classified into the securely-attached (B) and insecure-resistant (C) categories using Ainsworth's criteria. On the basis of prior research suggesting that the Strange Situation is an especially stressful experience for Japanese infants, we hypothesized that there would be no significant associations between social referencing and attachment classifications among Japanese infants. In the U. S. A., social referencing in episode 3 is associated with attachment classifications but proximity seeking/maintaining is not. Different results were obtained in the present study. There were associations between fearful reactions and attachment classifications, but between social referencing and attachment classifications. The findings indicated that a situation that was ambiguous for U. S. infants evoked fear in Japanese infants. This undescored previous findings indicating that the Strange Situation may be more stressful for Japanese infants than for their American peers.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 第1の研究では5ヵ月児と母親との情緒的コミュニケーションについての日米両サンプルについての記述的データを提出する。両サンプル間で母親の乳児の情緒表出に対する反応に共通点と差異点が見いだされた。児のポジティブな表出に対しては日米いずれの母親も同じポジティブな表出で応答することが多い。これに対して児の表出に対する無応答の割合は日本のほうが高い。第2の研究では12ヵ月児のストレンジ・シチュエーションのエピソード3(母と児と見知らぬ女性の場面)における児の母のほうを見るというreferencingについて日米比較がなされた。米国サンプルではreferencingと愛着のABC分類とに関係が見られたが、日本では有意な関連はなく、恐れ反応とみられる母への接触との間に関係が見られた。すなわち日本の12ヵ月児はこの状況でかなりのストレスを受けているといえる。